

2025年4月27日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教34「終わりの日の希望」

ミカ4：1～3、ヨハネ6：34～40

聖書には食事にまつわる話がよく出てきます。神さまはイスラエルの人たちにマナを与えて養われました。主の祈りでは「日用の糧を与えたまえ」と祈ります。食べることは人間が生きていく上で重要な営みです。決して卑しいこと、低俗なことではありません。パンの問題は、わたしたちの命に直接関わることなのです。イエスさまが「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(35節)と言われた時、それはイエスさまが、毎日の食事と同様、わたしたちの命に直接関わる存在であることを示しています。ただこの場合の命は、肉体だけではなく、もっと深い部分、魂の部分も含めた命です。そこから養われなくてはなりません。多くの人々は、そのことに気づいていません。単なる肉体的な食事だけで十分と思っている。でも人間が活着ているのはそこだけではないのです。

イエスさまは、「わたしが命のパンである」と言われました。注目していただきたいのが、ここにヨハネ福音書に特徴的な言葉、「わたしは～である」(エゴー・エイミ)が出て来ます。第6章20節に海上歩行の奇跡のところで「わたしだ。恐れることはない。」と言われた。この「わたしだ」がエゴー・エイミです。英語ではI amです。わたしがあなたたちを養うパンだ。あなたたちが生きていくために本当に求めなければならないパンは「わたしだ」と言われるのです。ここは重要なところです。

この後も、ヨハネ福音書が、繰り返しこのエゴー・エイミ「わたしは～である」「わたしだ」と強調します。他にも「わたしは世の光」「わたしは良い羊飼ひ」「わたしは道であり真理であり命である」それは、イエスさまそのものが、わたしたちの人生になくはならない存在であることを示しています。イエスさまをまことのパンとして、まことの光として、羊飼ひとして、道として、真理として、命として出会うこと。自分の人生にかけがえのない存在として迎えること。そのことが、人間が生きる上で決定的なことだと教えている。

度々、説教でも引用しますが、永井春子先生が『青少年のためのキリスト教教理』という本の中で、キリスト教とは何ですかと問うて、キリスト教とはキリストですと答えていることを思い出します。これは非常に的を得た言葉です。キリスト教とは何か。いろいろな答え方ができるでしょう。イエスさまの教えとか、聖書の教えとか。でもわたしたちはそういう教えに感化されているわけではないのです。教会に来て、礼拝に集まって、聖書を読んで、またキリスト者と呼ばれる人たちに会って、そこで何が起っているのか。イエスさまに出会っているのです。37節「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る」とあります。この「来る」ということも、ここでの重要な言葉になります。イエスさまのところに来る。来るということは出会うということです。会いに来るのです。先週のイースターの礼拝では受洗者が与えられました。それはイエスさまのところに来て、イエスさまと本当に出会ったということです。単に顔見知りになったということではない。かけがえのない存在として出会う。自分の人生にとってなくてはならない存在に出会う。それが洗礼です。ですからぜひ教会に来て、イエスさまに出会ってほしい。わたしたちが伝道するのは、そのために他なりません。

「父がわたしにお与えになる人」(37節)という部分に注目しましょう。これは「わたしに与えてくださった人」(41節)と繰り返されます。父なる神さまがイエスさまにお与えなる人とは誰でしょうか。それは言うまでもなく教会に集うわたしたち一人一人です。わたしたちは、神さまがイエスさまにお与えになられた、つまりイエスさまのものとされたわたしたちです。神さまがわたしたちをイエスさまに託されたと理解してもよいでしょう。そこでわたしたちはイエスさまと一体になる。「一心同体」と言いますが、イエスさまと一つになっていく。そのためにわたしたちはイエスさまというパンを食べるのです。

クラウド・リーゼンフーバーというカトリックの神学者は「食事をするときに自分自身の命が自分とは別のもの(食物)を受け取り、それを自分に同化することによって養われる限り、食べるということは、人間が他に頼り、他を受け入れることによって自分自身になるという最も本質的なことを学ばせ実現させている」と言います。確かにそうで、パンは自分の存在とは別であり、その存在の外にあるもので、それを受け入れることで自分自身になる。イエスさまが「わたしは命のパンである」と言われるとき、そのイエスさまを食べる、イエスさまを受け入れることで本当の自分自身になる。それはイエスさまの救いによって、罪を赦されて、神さまの子どもとされた自分になるということでしょう。イエスさまの十字架とよみがえりの命にあずかり、罪に死に、新しい命に生きることです。それは新しい自分であり、本当の自分です。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」(39節)この言葉は「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3:16)を思い起こさせます。ここに「与える」(ディドーミ)という言葉があります。これはイエスさまが命を与える、献げるという意味でも使われます。ご自身を命のパンとして、十字架で献げ尽くしてくださった。ご自身を与えることで、わたしたちと出会われ、わたしたちと一つになり、わたしたちは神さまの子として新しく生かされるのです。

今日の御言葉では「終わりの日の復活」が約束されています。「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」(40節)「終わりの日」とは終末のことですが、それは人生の終わりとして理解してもよいでしょう。どのような人生でも、イエスさまに結ばれて神さまの子どもとして最後を迎える。そのための命のパン、イエスさまが与えられていることは何よりの希望です。神さまはイエスさまを与えて、わたしたちが終わりの日まで持ちこたえることができるようにしてくださいました。神さまの御前に立つことができるようにしてくださいました。どうか教会に来て、イエスさまに出会ってください。洗礼を受け、聖餐にあずかってください。そこに本当の命の養いがあり、そこから本当の自分が始まります。

天の父よ。わたしたちを神さまの子どもとするために、あなたはご自身の独り子イエスさまを惜しまず与えてくださいました。どうかイエスさまに出会うことができますように。イエスさまを命のパンとして食べることでいよいよイエスさまと一つになり、終わりの日まで神さまの子どもとして歩み続けることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。